

Title	高木壬太郎の事績を尋ねて : 1898 年?1904 年
Author(s)	川崎司
Citation	聖学院大学論叢, 21(2): 203-220
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=930
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

高木^{みず}壬太郎の事績を尋ねて

— 1898年～1904年 —

川 崎 司

The Footprints of Mizutarô Takagi

— from 1898 to 1904 —

Tsukasa KAWASAKI

This essay is a continuation of *Mizutarô Takagi's Youthful Days* and *The Footprints of Mizutarô Takagi* works published in 1999 and 2002, respectively.

Thirty years ago I gravitated to studying the pure character of Mizutarô Takagi(1864-1921) and his career. He was faithful in the pursuit of truth as a pastor editor and educator, caring neither for praise nor blame.

This essay is an interim report of his life-long search for truth which covers the years 1898-1914.

Key words: Lofty Ambition, A Pure Character, A Faithful Cosmopolitan, A Private Soldier of Jesus, God's Love

本稿は、先に『聖学院大学論叢』に発表した「若い日の壬太郎」(11巻3号)、「高木壬太郎の足跡をたどって— 1889年～1898年 —」(15巻1号)の続きです。34歳から40歳の事績を尋ねてみました。

祈禱する cosmopolitan

霊性上の進歩を願い「基督に帰れ」の一段と強い語調をもって壬太郎は、明治32年1月から築地三原橋教会で日曜朝の説教を、また東洋英和学校神学部で毎日1時間3年級の比較宗教学と説教を受け持つこととなります。

同じ年の6月、麻布教会第五代牧師・小林光泰が42歳でこの世を去ります。体調をくずし晩餐会・愛餐会の司式を壬太郎に頼んだ直後のことでした。悲しみに包まれた日本メソジスト教会年会葬で壬太郎は故人の履歴を朗読し、その〈高潔なる敬虔の生涯〉に報いています。^[1]

高木^{みづ}壬太郎の事績を尋ねて

葬儀の前々日、『防長回天史』の割り当て箇所を書き終え（光泰の死を悼みつつ）〈中に在て風雲を睥睨するは空の空なり。根拠を地方に作るに如かず〉の声に送られて『信濃毎日新聞』主筆として長野に赴こうとする山路弥吉の和やかな送別会に出席した〈弥吉の最も久しき郷友〉² 壬太郎は、非凡な歴史学・批評眼・文才と高尚な品格を備え教会の外から靈魂を救う事業に従うこの新聞記者に次の言葉を送って心からの飛躍を祈っています。

“…足下願くはコスモポリタニズムの宣伝者たれ、議論する處此立脚点よりせよ、余の所謂コスモポリタニズムとは世界のセチゼンシツプたるの謂也、世界の大勢より打算して事を判断するの謂也、今や狹隘なる国家的精神、地方的感情は殆んど將に我國家を滅ぼさんとす。足下健在希くは我國家と國民とを此禍より救へ、…”³

壬太郎もまた地方（静岡）に根拠を据えて、徐々にでも日本基督教会独立の基礎を固める心積りでしたが、七月から神学部を専任に中央会堂の牧師を兼ねることとなり、麻布区飯倉片町の自宅から本郷まで通って信徒の訪問や青年・学生への説教などをつとめ、寂れゆく伝道界に幾分かの活気をもたらしました。⁴

翌明治33年5月に開かれた日本メソジスト教会第12回年会では、指名委員・教育委員・予算委員・年会特別委員・東洋英和學校理事會員・中央會堂資金募集委員・條例改訂委員・宣教師會交渉委員・日本メソジスト教会教育會役員・福音士試験委員・護教委員などに選ばれるとともに駒込教会牧師を命じられ、麻布区永坂町の自宅から駒込まで出向き、更に歩いて15分くらいの中央會堂へ人力車で駆けつけるという一層多忙な日常を負うことになります。⁵

東京基督教青年会の通常會員となつてほどなく、妻の梨花が盲腸炎で日本赤十字社病院に入院。第12回夏期學校の講演も取り止めて、教会と病院を往來する夏を送つた⁶後、9月からは北清事變に通訳官として従軍中の岡田哲藏に代わつて、青山學院で週2回英語を教える仕事がかかります。⁷

同じ9月、内村鑑三によつて日本最初の聖書研究雜誌『聖書之研究』が創刊されます。中央會堂に鑑三と小野善太郎・海老名弾正三人相寄りドイツ神學を原典で學ぼうとドイツ語の研究に励んだというのはこの前後のことと思われませんが、同じ頃壬太郎も多忙のなかギリシア語・ヘブライ語・ラテン語を學び始めています。ドイツ語は明治36年5月頃から始めています。⁸

この年（明治33年）の秋から2年間寄寓して壬太郎の熱心な勉學の姿を身近にした八木小兵衛は、〈一見極めて理智的で余り信仰的でないように思はれた〉壬太郎が意外にも〈祈祷の人〉であつたことに驚いています。⁹

“多年失望の中に在りし基督教会が再び喜悅と希望の中に入るを得た”¹⁰と思われた「二十世紀大挙伝道」に最も力を傾けた海老名弾正が異端と見なされ、神田・本郷・小石川・牛込4区の大學伝道牧師會（明治34年4月21日、於東京基督教青年會館）で〈保守組〉の排斥に遭つた時、同會議長・壬太郎はあくまでもその不當を鳴らしました。¹¹

曾木銀次郎（築地教会牧師）と連れ立って小崎弘道（霊南坂教会牧師）を訪ね、伝道のこと、ミッション対日本教会のことなど語り合い〈愉快的ヒト時〉を過ごしたのも同じ年の春のことです。

〈…其際小崎氏は僕（＝銀次郎）等に向ひ「三四年後には組合教会も愈よ一先づミッションとの関係を断つ積りだが其際両君とも我等と一緒に御働きになつては如何ですか」とのはなしがあつて僕は軽く「或は御願ひする様になるかも知れません。どうか其際はよろしく」と挨拶し、高木は其際全然ソナナ事を考慮しようとしなかつたと云ふのではない。兎に角僕等は思想的には頗る当時の組合に近かつたので組合の方にはしつて行つても別に不自然ではなかつた。…〉¹²⁾

ハンセン病に罹り仙台中学校を退き上京し外国語学校へ入る準備をしていた（のちに癲病者伝道団を組織する）安倍千太郎が、中央会堂で壬太郎の説教を聴き〈一種の靈感に打たれた〉のも、壬太郎が教会内の一致を願い求道者の養成に邁進しようとしていた明治34年4月頃のことです。

〈…或夜の事、行先を思ひ今の身の不幸を啣ちつゝ沈鬱な心をもつて、フラツと散歩に出た。春木町の通にかゝると、今日しも日曜日と見えてそこにある煉瓦造の大きな教会は明るくなつて、説教があるらしい気配である。私の足は何心もなく会堂に向き、中に這入つて席についた。私は生れて初て教会といふ所に入つて、初めて説教といふものを聞いた。説教者は眼鏡をかけた髯のある立派な人であつた。それは今の青山学院長神学博士高木壬太郎氏であつた。何を話されたか今は少しも覚えてゐない。然し其時私は一種の靈感に打たれた。それは斯うであつた。一世には目にこそ見えね、私を守つて下さる神があるべきである。私はその神を信じて一身の安心立命を得ることが出来よう。私はクリスチヤンになるべきだ。訳は分らぬが其処に云ふべからざる慰安と高潔があるに相違ない—。そして私は其場で決心し、説教が済んでから、イキナリ今の説教者の所へ行つて、「私はクリスチヤンになります」と申し込んだ。すると彼は、「あゝさうですか」とさも嬉しさうに、「信者になるには三ヶ月の試があつて、それから洗礼を受けるんですから、続いて集会にお出でなさい」と言はれて、一人のくるくる坊主見たような小柄な青年に私を紹介して呉れた。此人は其時その教会の副牧師の小野善太郎氏であつた。（其後洋行されて多分神学士にでもなつて今日本の何処かで働いて居られると思ふ）。此出来事が明治卅四年の四月であつた。私は廿一歳。其後副牧師が自宅を訪問して聖書のある個所を話して聞かした。…そして三月を経て其年の六月、今は二人共博士である高木氏とコーツ氏とに由り、首尾よく洗礼を受けたのである。〉¹³⁾

同じ春、公認学校の宗教教育を禁ずる「文部省訓令第12号」（M32.8.3）に躓いた東洋英和学校は遂に瓦解してしまいます。理事会員の一人として必死に異を唱えましたが聞き入れられず、名譽の歴史をもっていた同校は閉鎖され、壬太郎は suitable position を失ってしまいます。¹⁴⁾

『護教』 主筆

しかし5月の第13回メソジスト教会年会で壬太郎は、派遣任地を引き続き駒込教会・中央会堂と定められ、麻布区永坂町から本郷区西片町の駒込教会牧師館に転居後、7月から別所梅之助の後を継いで『護教』の発行兼編輯人という新たな活躍の場を得ています。

新旧主筆、去就の辞に曰く。

〈読者諸君 余（＝別所梅之助）は本号（＝518号、M34.6.29）を以て護教記者たる任務を了へたり。次号よりは高木壬太郎君専ら事に当らるべし。三十年六月余が山路愛山君の後を承けて此誌の編輯に従ひしより以来今日に至るまで満四年、この間兄姉が余を憐み、護教を補けられたる懇情は余の忘るゝ能はざる所なり。護教の配布数の次第に加はり、近年の収入額の三十年代以前のに比すれば二倍以上に達せるが如きは、表はれたる事のみ。余は此外に謝すべき幾多の記憶を有す。高木壬太郎君はつとに諸君の知る所なるべし。君の神学に深きもとより余と同日の談にあらず。その文はその思想の如く明晰なり。余は読者の為に好記者を得られたるを賀す。而も山路君の後期より護教の記者は記者たると共に経済上の責任あるものなり。されば余は兄姉の友情得つゝも、時に財政難を歌はざるを得ざりき。今や此らの憂少かるべきを信ずる理由ありと雖も、願はくは諸君高木君をして此嘆を再びせしむるなかれ。久しき前より少しく閑を得て読書せんこと余の望なりき。今や明年の美以教会年会までは、格別用なき身となりたれば聊かかなりとも好みの書など読まんと欲す、かの会の後は再び諸君の後に従ひて伝道の事に当らんなり。〉^[1]

“前主筆別所君辞意固くして動かすべからず。遂に其印綬を解きて去れり。依て余（＝壬太郎）は護教委員会の推薦に依り、幾度か躊躇の後遂に君の後を襲ひ本号（＝519号、M34.7.6）より編輯の事務に従事する事となれり。別所君が山路君の後を承けて、過ぐる四年間本紙の爲め拮据せられたるは読者諸君の知る所也。護教が今日の盛況に達したるは実に君の力に依れり。余は読者諸君と共に深く君の辞任を惜み、且厚く君に向て謝せざる可らず。余や元来浅学短才にして且文辞に嫻はず。雄健なる山路君の筆、艶麗なる別所君の文素より余の企及する所に非ず。唯読者諸君の厚き同情と懇なる輔導とに依りて此任を尽さんことを期するのみ。就任に臨み謹で一言を序すと云爾。”^[2]

独裁的の時代・信仰箇条によって相争う時代はようやく去って教会内部との戦いも比較的少なく、壬太郎はメソジスト三派合同の持論をもって自らその連鎖となることに努め、また学問的な論文—例えば「聖書研究案内」「基督教とは何ぞや※」「宗教と科学」など—も次々と発表して、〈ねむたき世の中〉に光を放ちました。^[3]

月曜日に社説を半日で書き、夜は中央会堂の求道者会で学生を導き、火曜日には補助編輯者と「寄書」「教報」などの欄を整え、遅くとも夜の10時には目録を作って原稿を青山学院内の活版所に送り、木曜日には校正に従うという規律正しい護教記者と牧師の職の寝食もないほどに多忙な生活を不平の一つももらすことなく続け、日本では稀な講壇の勇将・文壇の傑物であることを広く深く印象づけました。^[4]

『護教』は明治35年1月（No.545）から体裁を一新^[5]、「社説」「論説」など改良を図り自由な思想・自由な研究を奨め、植村正久対海老名弾正の神学上の論争を受けて「海老名弾正の三位一体論」「化身論」「進歩派と正義派」を掲載。神の化身・基督の贖罪を力説する植村に対し、化身説やロゴス説を信ぜず新時代は新神学を要すと主張した海老名を異端者とは呼ばず同情を表するとともにその非新約聖書的な点を指摘しています。^[6]また堀口弥摩吉の「鉍毒被害地新年視察旅行の記」を載せ足尾鉍毒事件に対する輿論の喚起に努めています。^[7]

一方中央会堂の事業は、明治35年5月カナダ・メソジスト教会伝道会社々長 Alexander Sutherland の来日を機に中央会堂と中央教会に二分され、中央会堂は広く福音を伝え求道者を起こすことを主眼とし宣教師がこれに当たり、中央教会は中央会堂の伝道により回心した会員に日本人牧師が訓練を施すこととなり宣教師と牧師の関係も疎遠となる中、翌年には小野善太郎副牧師も山梨に去り、壬太郎が独力で対処することになります。^[8]

同じ年（明治35年）の夏、第3回角筈夏期講談会講師の任務を果たした内村鑑三が、真情あふれる罪の告白をしてその会に集まった人々を感激させた〈愛すべき田舎漢〉高畑和助（上長尾の人で、壬太郎を慕い一時高木家に寄寓していたこともある^[9]）に連れられ、脚絆草履掛けで九里の険しい山道を越え壬太郎の故郷の人々の歓待を受けた鑑三はその夜、壬太郎の伯父・八木左衛門（前村長）の家の台所に開かれた小演説会で、「日本今日の困難」の原因を東西両文明の衝突に求め例を軍隊と議会の腐敗に引き、打開策として東洋主義＝〈支那流の忠孝主義〉を捨てあくまで西洋主義＝〈基督教の兄弟主義〉を取るべきことを苦い口調に乗せて説いています。第7回総選挙の4日前のことでした。^[10]

日頃、鑑三とともに苦言忠言をふるう壬太郎が、弟愛助の妻・さくの葬儀をすませ^[11]、鑑三に山また山の閑村まで足を運ばせた和助の〈一種の力〉に感奮する飯泉規矩三（相良教会牧師）と連れ立って上長尾に敝履を解いたのは、その13日後^[12]。壬太郎の帰省を聞いて寄り合う知己の中に、壬太郎を仰ぐ高畑喜太郎^[13]・和助兄弟もいました。壬太郎も、鑑三の気炎を留める八木伯父宅で、“身体も出来るだけ強壯を図らざるべからず、富資もあらん限りの力を尽して増殖を計らざる可らずと雖ども、更に大切なるは品性を進め、人格を高むることは是れ也。而して之れを庶幾するは之れを向上心に仰かざるべからず”と「神の性質と基督と人との関係」＝〈実生活と宗教との接触〉を声高く唱えています。^[14]

基督の一兵卒として

“各派の教会伝道者の欠乏を告げて、神学校の門前雀羅を設くる”秋^[1]、C.J.L.Bates（カナダ合同教会牧師）を迎えた中央会堂で「基督教的品性^[2]」を説く壬太郎のもとに、長野から山路弥吉が訪ねてきました。『信濃毎日新聞』主筆の後任を打診したものでしょうか。弥吉の11月27日の日記には〈高木坎堂を本郷に訪ふ。坎堂学東西に通じ、文章時流を抜く。而して隠忍沈黙人に知らるゝことを好まず。人と為り甚だ塚越停春君に似たり。…〉^[3]とあります。

壬太郎は、〈弥吉や自らの境遇を省みて〉有為の信徒のために「宗教家分業の必要」を強く訴えて止みません。

“小数の人を区別して或は全く身を教育の事業に委せしめ、若くは全く身を文学の事業に委せしめよ。而して其中殊に或人々、所謂学者膚の人々を選びて専心学問の講究に従事せしめ、斯くの如くして一方に在ては世の思想家と角逐して非基督教的思想を縦横無尽に撃破し、基督教的思想の光明を發揮せしめ、他方に在ては基督教思想界の泰斗として、牧師、伝道者の教師たり、指導者たらしめよ。彼等より決して牧会の技能を望む可らず。又彼等に実地伝道の働を強ゆ可らず。彼等が思想界に貢献する所あらば之を以て足れりとすべし。…若し我宗教界にして、実地伝道の必要と共に、思想修養の必要を認め、其人の好む所と長ずる所とに従て、各々其驥足を伸ばすことを得せしめば、青年有為の信徒亦来りてその一臂の力を致すに吝ならざるべし。亦何ぞ伝道者の欠乏を憂へんや。…”^[4]

明るる36年1月、弥吉は信濃毎日新聞社にとどまったまま〈豪健素朴な地方人士が哲理と信仰を有する政治学をもって倫理と道德に関する時代思潮の気焔を東京に吐く一機関〉『独立評論』^[5]を創刊します。自給独立の精神を湛え“基督教の使命を明にし、聖書の真理を説き、而して又之れが實際の応用を論じ、内は以て信徒の建徳を助け、外は以て世人の指導に供せんとする”『護教』^[6]＝壬太郎は、“山路愛山氏主筆の独立評論出づ、吾人敢て自ら好む処に僻するに非ずと雖も、愛山氏の議論、文章共に一種の異彩を放ち何人も企及すべからざるものあるを信ずるもの也、吾人は謹んで其門出を祝す”^[7]と田舎の一新聞記者が文字通り他人の助けを借りず自前の金銭を投じて世に出した時代思潮を東京に吐くこの一機関誌の盛んな意気に声援を送り、第一号に、“常に博学を銜ふ東洋哲学の大家”の非を鳴らす「井上博士の釈迦牟尼伝を読む」を寄せています。^[8]

5月22日、一高生・藤村操、「巖頭之感」（万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」、我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る）を樹幹に遣し華巖の滝に投身。“真正完全なる宗教は死を連想せしめずして、生を与ふるものである”と信じ“約百の如き深大なる、勝利に至る煩悶”を望む壬太郎は、同世代に衝撃を与えたその死を“不健全なる思想”と疎んじています^[9]。弥吉も、〈現

在の倫理、道徳を無視するを以て自ら甘んじ、自ら誇り、総てを破壊して何ものをも建設せざるを以て自ら甘んじ、自己の覚醒を得意として漫然世を渡るのみならば是れ一種の小楽天主義者のみと難じ、〈怯者・犬死〉とまで決めつけています¹⁰。

極東の雲行きが怪しくなり「露西亞打つべし」の声が一段と高まっていました。鑑三と弥吉は旧盟こそ回復したものの、それぞれ戦争廃止説・露西亞征伐論を掲げて一步も譲りません。壬太郎は“嗚呼国を奪ひ地を略せんか為めに妄りに兵を弄する者は、是れ文明の敵、人道の敵也。…吾人もし文明に味方し、平和の友たらば、断じて彼（＝露国）が狂暴を許す可らず。我国にして真に戦争せざる可らずとせば、唯是れが為めのみ。今に於て又何ぞ主戦非戦を論ずるの要あらんや。”と言いつけて、十月三十日、山梨・静岡・長野へ「ジョン・ウエスレー降誕二百年記念運動」の旅に立っています¹¹。

帰京の三日前（11月13日）、壬太郎著『ジョン・ウエスレー伝』が出版されます。最も高等な「愛」を燃え上がらせ、儀式や信仰箇条や神学説や教会政治ではなく、「品性」に重きを置く時勢の指導者・国民の案内者 John Wesley¹²の伝記を著した壬太郎を、左近義弼はのちに〈君の頭脳の論理的なる、之を口にするも、筆にするも、条理整然として一糸乱れぬところ、学者の本領を離れずして、而も経綸の才に富み、又信仰に伴へる常識、いづれもわがメソヂストの教祖ジョンエスレイに似たるを思ひ、僕ハ潜に君を我国のエスレイと思ふてゐる〉¹³と讃えています。

“愛山の名声今や信州の野に普く、寒郷僻村之を聞かざるなし。椽大の筆其感化の及ぶ所大ならざるを得ず”¹⁴と壬太郎に言わせるほど文学の効用を発揮する弥吉も、ウエスレーを範として、何人にも了解し易く、健全にして實際的宗教を説く壬太郎の筆舌を熱賛しました。

〈…故山路愛山氏ハ、人を品騰するに、随分毒を吐く場合か多かつたか、私（＝平田平三）ハ氏の口より、称揚せられた二ツの事を、臆へてをる。一日雑談の末、我メソヂスト教会初代の牧師中に在りて、名物男といわれてをつた、故松本総吾翁の、人物評には、痛く感心せられてをつた事か一つて、他は高木博士の文章に関する賛辞であつた。愛山氏の言に拠れば、君は文章に対する、天成の素質を具へてをつた。罌堂（＝尾崎行雄）や沼南（＝島田三郎）等の人達は、議院に在つては、言論の雄である。だが同時に、文章の雄とはいへない。又筆と舌とに長けた者には、理想家であり、理論家であつて、実業家である場合は少ない。然も君は言論、文章の雄であつて、また實際家であつた。…〉¹⁵

株暴落の号外が、「陸海軍省、諸新聞に軍機の記載を禁ずる」の報が、衝突の急迫を知らせました。2月10日、宣戦布告。

世を挙って開戦に酔う中、弥吉は世間に少しく意外の感を与えながら『独立評論』を改題して『日露戦争実記』を刊行。時代の趨勢を見据える『護教』も侵略主義と非文明主義を撃つ基督の兵卒となって非戦論を退けます。

高木^{みづ}壬太郎の事績を尋ねて

“…吾人は素より平和を望むものなりと雖も平和とは必ずしも事無きの謂に非ず。故に真正の平和を来さんがためには、屢々戦争をも辞すべからざる場合あり。基督が「我れ平和を地に出さん為に来れりと謂ふ勿れ。我れ刃を出さんために来れり」と云ひ給ひしも此辺の消息を洩せるものにして、文明進歩の途上に戦争あるは誠に止むべからざる天の数也。基督教の使命は地に平和を来すに在りといふの故を以て、絶対的に戦争を非難するが如きは、畢竟手段と目的とを混同せるものにして、少くとも今日の実際に於ては実行すべからざる空論に過ぎずといふべし。…現下の問題は実は日露問題に非ずして世界の大問題也。単に日露の争闘に非ずして文明と野蛮、人道と暴虐との争闘也。…”¹⁶

“…吾人の非戦論者と異なる所は唯彼等が如何なる場合にも戦争を否認するに反し、今日の実際に於ては平和の為に戦争するの止むを得ざる場合あるを承認するに在り。然るに彼等吾人を目して妄りに戦争を賛同し、且之を煽動する者となし、附するに主戦論者の名を以てす。讒誣の甚しき者といふべし。更に甚しきは彼等が今回の戦争を是認する者を目して、世に阿諛する者となし、甚しきは幫間宗教家の名を附して嘲弄罵詈を極むることは是也。我輩は仮令彼等の説に賛同する能はざるも、尚彼等の意を諒とし、其主義の為に戦て倦まざるを称讃するに躊躇せざるに、彼等は敢て妄りに他人の心を忤度し、邪推し、而して報ゆるに罵詈を以てし、負はしむるに悪名を以てす。失礼千万也といふべし。…もし真に主義の為に主義を述べんとせば、先づ罵詈と嘲弄の言とを止めざる可らず。…我輩は彼等が無益の空論を捨て、人類と国家との為め、此戦争の禍害を少くせん為めに先づ其一本の指をつけんことを勧告せざるを得ず。”¹⁷

4月10日には、二ヵ月前に〈明治の文学史中に小さき位置を占むべき小さき史家として子孫に記憶せられんと欲するの希望なきに非ず〉ともらして『信濃毎日新聞』主筆を辞め東京（渋谷）の自宅に戻った〈金看板の主戦論者〉山路弥吉と登った麻布教会創立二十年記念の講壇から、壬太郎は「禍転為福説」を唱えています。

“…イデンの樂園は人生の初に在るべきものに非ずして、唯苦闘と争闘との後にのみ来るべし。平和と幸福との理想は唯争闘と悲哀とを経て後初めて達するを得べし。…吾人は日露の戦争を以て一大困難となし、我国が斯る不幸に遭遇せしを深く悲むと雖も、如上の事を信ずるが故に徒に戦争を以て罪惡也として悲観するを須ひず。神が禍を転じて福となし、此戦争に依りて国家の進運と世界の文明との為めに多大の効果の与へられんことを祈りて止まざるもの也。”¹⁸

非戦説を立て壬太郎と論戦に及んだトルストイアン・白石喜之助は、その頃の壬太郎の印象を次のように記しています。

〈…氏は文筆の人であつた。氏が執筆中の護教は山路愛山氏時代の夫れと相前後して実に光

彩陸離たるものがあつた。氏は牧会若くは教授の傍ら筆を執られたのであるけれども如何なる専任の主筆も企て及ぶ能はざる技倆を發揮せられたのである。然り名論卓説は風をなして筆端にあつまるとし言ふべく宗教上の議論は勿論政治文学の意見に至る迄吾人をして興味もて傾聴せしむるに足るものがあつた。自分が日本メソヂスト教会に参加したのは明治三十二年の事であつた。而して高木氏は何時でも我が相談相手であつた。盖し神学上の意見が極めて善く一致して居たのみならず思想上の興味が相似たるものがあつたからである。氏は有数の学者であり我は之れ眇たる一後輩に過ぎざりしと雖氏は何時でも自分を歓迎し大小ともに腹藏なく自分に打ち明けられたのである。而してそは氏が牧会を去りて青山学院長の榮職に就任せられてから後も毫も変はる所はなかつた。…氏は新思想家であつたとともに亦精鋭なる評論家であつた。特に思想上の問題に対しては忌憚なき評論を試みられた。日露戦争の時分であつた。自分はトルストイの著書を耽読せる余り頻りに非戦論を唱へ時の平民新聞や護教※に忌憚なき非戦の意見を発表した。而して自分の同志は亦新聞雑誌に非戦論を掲げて時論を動かさんと試みた。而して之れに反対する主戦論者は戈を揃へて非戦論を駁撃し余蘊を剰まさざらんとした。而して高木氏は評論家として側面に立ち非戦論に対して反対の矢を放たれた。氏の論鋒は精鋭当る可からず。自分たちは氏の反対説を駁するに非常なる苦痛を感じた。自分は其時氏が稀有の評論家にして単に評論家としても世に得難き天才である事を称賛せざるを得なかつた。氏が護教の主筆たるや久しい間であつた。而して自分は常に氏を助けて同紙上に執筆した。氏は何時でも自分の文章を歓迎せられて自分をして遠慮なく自分の所見を述ぶるの自由を与へられたのは自分の今日迄感謝して已まざる所である。…¹⁹⁾

〈…自分は此時分屢護教に執筆して陰に陽に護教の事業を補佐したのである。之れは氏が自分の文章を極度に称揚したるが為めのみではない。其意見や持説が互いに相共鳴する所のもものがあつたからである。實際神学上の見解も伝道上の意見も不思議に能く一致したのであつた。但し唯一事丈意見の衝突を齎した事があるのを記憶する。夫れは日露戦争時代に於ける戦、非戦の議論であつた。自分が非戦説の意見を時の六合雑誌や、護教に掲載するや真先に反対の鋒先きを向けたる者は氏であつた。散々に自分の非戦説を論難爆撃して余蘊を剰さなかつた。自分も之れに対して弁駁を試みたのである。議論は結局其儘で終て仕舞たが馬鹿を見たのは自分で、其様な論戦をしたるがために其筋の人に非戦論者の親玉と見られ、出入探偵の護衛を受くる難有身分と成るに至た。而して夫れが一時的でなくして戦時中であるから迷惑此上なしである。然し之れも身から出た錆だと思ふて諦らめるの外はなかつた。自分の非戦説は説にして我が主義ではなかつた。従て自分の非戦説を自ら裏切る事なしに押し通す事は出来なかつた。事實は学説よりも雄弁である。或年会（＝日本メソヂスト教会第17年会）時であつた。自分が山路愛山君と相携へて旧東洋英和学校の門前に出てんとして端なくも其処に日本海に於ける露国艦隊の全滅を伝ふるの号外に接した。其時山路君はステツキ

高木^{みづ}壬太郎の事績を尋ねて

もて傍の石を叩て万歳を連呼した。自分も夫れに和して痛快を号呼したのである。而して之れ実に自分の非戦説を裏切る心的状態なるに気付て衷心恥かしく感じ、従て高木氏の説こそ己れを欺かざる正直なる告白なるを羨ましく思ふた事である。…)²⁰

この間に壬太郎は、主に最近1, 2年間の『護教』に掲載された〈潤大なる見識と、時勢に後れざる活説教〉30有編から成る小冊子『宗教小観』を刊行。極端に流れず保守に陥らないその穏当な思想を改めて世に広く問うています。²¹

メソジスト教会指折りの壮年牧師となった壬太郎は、基督教徒が忠君愛国の臣であることを明らかにし、基督教が国民の宗教として公に皇室の承認を得るため、国民に不撓不屈の精神・高貴な理想・深大な覚悟を鼓吹しようと、日清戦争時の「基督教徒同志会」と同じ方針で「戦時伝道同志会」設立の提案者ともなりますが²²，“国家的基督教”の旗を翻すかにみえる壬太郎に同情を寄せる者は少なく，“誤りたる勤儉論”も加わって、『護教』の購読中止を言い立てる者も出て、“我儘笛吹けども爾曹おどらず、哀をすれども爾曹胸うたず”，壬太郎の口から深い嘆息がもれました。²³

注

凡例

- ◇引用文中、漢字は原則として新字体に改め、仮名づかいは原文にしたがった。
- ◇壬太郎没後、記念録の作成にあたり、高木二郎氏（壬太郎次男）が壬太郎の備忘録（未見）より抜き書きしたものを『日記』〔東京神学大学蔵〕と記した。
- ◇“ ”…壬太郎文から引用、〈 〉…他の文献から引用、《 》…草稿・書簡・日記・覚書など、
【 】…所蔵先、（ = ）…筆者による注、（ → ）…参照
- ◇M…明治、T…大正、S…昭和、H…平成

祈禱する cosmopolitan

- ① 「小林光泰君を吊ふ」〔教報〕○小林光泰氏の永眠及び葬儀『基督教新聞』M32.6.9、「故小林光泰君略歴」〔教報〕○小林光泰氏の葬儀『護教』M32.6.10
- ② 「諸友訓誨録」愛山生『信濃毎日新聞』M32.6.7
〔教報〕○山路弥吉君送別会 さる土曜の夜芝三縁亭に知友相会して、愛山兄が長野の新紙に主裁として赴かるゝを送りぬ。江原素六氏主人役として挨拶あり、次で石川安次郎、松本君平、竹越与三郎等諸氏の送辞、山路君の答辞ありき。我らは君の成功を信じ之を祈るなり。〕（『護教』M32.6.10）
〈六月三日の夜は江原素六君、開拓社の竹越与三郎君、日報社の龍居頼三君の三氏主唱して会し余の為に送別の宴を三縁亭に張られたり。…余と文学の交、最も久しき郷友にして新帰朝者たる東洋英和学校の教授、学士高木壬太郎氏も来れり。…〕（『諸友訓誨録〔承前〕』愛山生『信濃毎日新聞』M32.6.14）
- ③ 〔小品集〕愛山詞兄に贈るの書『信濃毎日新聞』M32.6.14
- ④ *〔教報〕○個人 高木壬太郎氏 麻布区飯倉片町三十二番地へ移転せられたり。〕（『護教』M32.1.7）*〔時言〕▲中央会堂と麟祥院 …基督教の中央会堂で演説があれば聴衆はいつも満堂、立錫

の地なしで、これに反して麟祥院の時は聴衆寥寥殆と門前雀羅を張らんとするの有様である、…」（『通俗仏教新聞』M32.11.15）

⑤ 『日本メソジスト教会第十二回年会記録』M33【青山学院資料センター】、「高木先生没後二十年」比屋根安定『青山学報』S16.10,「高木壬太郎」比屋根安定『教界三十五人像』S34

⑥ 「〔青年会事業〕九. 新入会員（五月廿三日・六月十六日）」（『新世紀』M33.6.）,《日記（M33.8.8）》,「〔学報〕○第十二回夏期学校」『護教』M33.6.30）

⑦ 「岡田哲蔵先生略伝」岡田先生遺稿編集委員会編『Orion Stars and Other Poems 及び邦語自訳』S32

⑧ “…聖書文学の野も亦之を教界外に在る人々の開拓に委せ、教会は平然として何等の爲す処なく、日曜日毎に僅少なる人々を集めて、平凡なる説教を爲すを以て満足せんとするに至ては、我輩慚愧悲哀極て泣かざるを得ず。幸に内村鑑三氏あり、既に久しく『聖書之研究』を發行して、聖書文学の研究に貢献する所少からずと雖も氏は果して近時の進歩せる聖書批評に曾て其指を染めたることありや。我輩の知る所を以てすれば、氏の聖書に関する知識は古風にして、今日進歩せる人々を満足せしめ得べきや甚だ疑し。（近頃大阪に於て『聖書講義録』の新に發刊せられたるは大に賀すべし思ふに将来有力のものとならん）…”（「教育ある信徒と教会と〔五〕」『護教』M38.4.1.）（→「中央会堂と私」古橋柳太郎『中央会堂五十年史』S15）

⑨ 「逝ける高木先生」八木小兵衛『教界時報』T10.2.18,「八木小兵衛略歴」『日本メソヂスト教会 第三拾一回 東部西部年会記録』S13※小兵衛は、明治44年3月25日、壬太郎から長老の按手札を受けている。（『日本メソヂスト教会第四回東部年会記録』M44）

⑩ 「今後の事業」『護教』M34.7.13

⑪ 「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T10.4, 日本組合本郷基督教会編『本郷教会創立五十年』S11* “〔明治34年〕六月十六日 日 快晴 …本郷, 神田連合大挙伝道運動二関シ海老名弾正氏ト協議ノ件アリ, 往テ訪フ。…”《日記》

⑫ 《曾木銀次郎自伝》【曾木節氏】

⑬ 「半生の思出（七）」安倍千太郎『聖潔之友』T6.5.10

⑭ 「青山学院の過去現在及び将来」『青山学報』T5.12

“明治卅三年七月十二日（木）午前九時図書室ニ於テ山中氏ノ祈祷ヲ以テ開會, 出席左ノ如シ ジョン, スコット ジー, エム, ミーチャム エー, シー, ボルデン アール, マケンジー 山中 笑 江原素六 高木壬太郎 デー, ノルマン …江原, 高木両氏調査ニ係ル東洋英和学校普通学部再設案ハミーチャム氏ノ動議全会一致ヲ以テ之ヲ採用シ加那太伝道会社ニ進達スルニ決ス, …東洋英和学校普通学部再設私案 東洋英和学校普通学部ハ明治廿八年（一千八百九十五年）に於て尋常中学科に変更爾後文部省規定の過程を採用し来りしが文部大臣訓令の結果として去四月を以て全然之を廃止するに至れり, 依て従前の過程に多少の変更を施し普通学部再設致度左に案を具して伝道局の評決を仰く, 一目的 東洋英和学校設立の目的は日本の青年に基督教的教育を施さんとするに在りし事は本校の規定に明記する処也, 今再興せんとする普通学部の目的も亦之に外ならず, 而して目今の必要に応し中学の教師たらんとするもの及実業社会に入らんとするものを養成し此の如くして教育及実業社会に基督教の感化を及ぼすの基を立てんこと, 又本校に來りて学ふ者伝道者たらんことを志願する者を出さん事を期す, …一文部省との關係如何 文部大臣の訓令は中小学校に於て宗教的教育を施し儀式を行ふを禁したるものにして其他の学校は其範圍外に在り, 故に前述の如き学校を設えるも宗教上の事に関し文部省の干渉を受くるの恐なし, 日本校の創設は既に久き以前に在るを以て校舍※の設備を完全にせば徴兵猶予等の特典を得ること容易也, …”（《東洋英和学校理事会記録》【東神大】※〔教報〕○麻布東洋英和学校 神学部には目下四名ほどの生徒あり。麻布中学校は江原素六氏処々を奔走して資金を募集中にて既に一万余円を得校舍建築中なり。落成の上は左右に袖を出したるが如き建物とならん。これは文部省にて製したる図案なりときく。）（『護教』M33.4.7）→《東洋英和学校・麻布中学校沿革》【東京都公文書館】

『護教』主筆

① 「別れを告げ参らす」別所梅之助『護教』M34.6.29

〈…私はミツシヨンの資を借らずに、自給伝道をしたいとあせつたが、当時の事情はそれを許さなかつた。それで明治三十年、週刊新聞「護教」を引きうけた時も、私はとにかく年額七百年の補助金だけでやつていつた。瘦せ我慢か、無謀か、誰も私のした事を買ってくれまいけれど、私としては、キリストとその教会の名で、さうしたのであつた。…〉(別所梅之助『隨筆 朝のおもひ』S15)〈…私が引きうけてから、「護教」は五百部刷るのを、牛の歩みの少しづつ増して、二年の終りには六百部、三年、四年には七百部ほど刷り、直接講読者数は一時の四百未満から、第二年には四百台、三年、四年には五百六十人ほどになった。広告料は第一年に以前の十倍の百円、それから百三十円台、百九十円台と年々に増し、講読料も後には年一円三十銭にした。さりながら七百年の補助金では、週刊誌の発行困難を覚えて、後の高木壬太郎兄に譲るに当つては、補助金を増してもらふ備へをした。さても銭勘定のやゝこしさ、西鶴の町人物を読むよりもむづかしかつた。…〉(別所梅之助『生きんとする意志』S23)

② 「就任の辞」『護教』M34.7.6

*〈[明治34年] 四月十三日 晴 七時起床 高木、三上同伴、山路氏宅(=長野市間御所町)を訪ヒ晩刻迄語る、…〉(《橋本陸之日記》【塩入隆氏】)この日、壬太郎は、弥吉から『護教』の運営についても助言を受けたと思われる。

③ 「日本メソヂスト時報五十年略史〔四〕別所主筆を送り高木主筆を迎ふ」兼藤栄『日本メソヂスト時報』S15.9.27, 「一年有半」を読む『護教』M34.9.14

※ “…日本にハルナツクを紹介したるは蓋し予を以て嚆矢とす、予は必ずしもハルナツクの所説に同意したりしにあらざ。然れどもハルナツクが基督の基督教、使徒の基基督教、教会の基督教と峻別したりし、歴史的の事實は其真理なるを認めざるを得ず、故に予は明治三十五年の初めより「護教」紙上に同博士の所論の要領を連載し、後(=M35.5.25)、一冊となつて之を刊行したりき。”(「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T10.4)

④ *〈…護教の主筆たりし時には、毎号必ず氏の文章が出て居た。而して教界の他の新聞雑誌は発行の期日にぬぬことが少からずあるのに護教のみは規則正しく発行日に出るのであつた。実に氏の意志のすぐれたるを語るものである。…〉(富永徳磨《私の思ふ木壬太郎氏》T11【東神大】)

*〈…君ハ護教記者たりし時と、青山学院長たりし時とを問はず、社用或ハ校用に非ざる私信に一枚の状袋、一片の切手を社交費の中より用ひたることなく、又毎週護教の原稿を送るべき時に送らずして、印刷所に迷惑をかけたることもなく、かつ寄稿者に筆墨料を忘れたることもなき、此等小なるを以て、而も小ならず、君の性格のいかに直く、いかに正しきかを窺ふに足る、直小事に忠なる大人格とたたへねばならぬ。…〉(左近義弼《高木君ハ死なぬ》T11【東神大】)

(→「大挙伝道に就て」『護教』M35.5.3, 「回顧と期望」『護教』M43.9.24, 「高木壬太郎氏の事ども」白石喜之助『教界時報』T10.5.20)

⑤ “[明治35年] 一月十八日 土 晴 …福音新報嚮ニ護教ノ改良ニ就キ云フ所アリ、今又毎週新誌ノ讃辞(→「『護教』の改良」『東京毎週新誌』M35.1.17)ヲ受ク、読者ヨリモ亦感謝ノ声ヲ聞ク、骨折甲斐ノアルヲ喜ブ。聊カ基督教文学ノタメ貢献スル所アラントセルハ迂生年来ノ希望也。…”《日記》

⑥ “[明治35年] 四月二日 水 雨 フェアアベルン、オール諸氏ノ化身論ヲ讀ム。来ル十九日美以教会年会ノ講演ヲ委嘱セラル。化身論ニ関スル所見ヲ述ベントテ今之ガ準備ヲナス也。此準備ノタメ暫ラク他ノ事業ヲ中止セリ。四月四日 金 晴 午前 ケアード氏ノ著書ニ就キ其化身論ニ関スル部分ヲ研究ス。…コーツ氏ヲ訪フテ化身論ニ関スル書物二冊ヲ借り来ル。… 四月十九日 土 雨後晴 …蓬萊町美以教会ニ至リ美以年会ニ出席、護教ニ関スル報告ヲナシ①、…午後四時ヨリ美以年会ノタメ化身論ノ講演ヲナス②。…”《日記》

① 〈…○第四日(四月十九日土曜日)…議長は日本メソヂスト年会々員にして護教記者なる高木壬太郎氏を紹介せり氏は一場の談話を為し其財務の報告を述べられぬ…○第七日(四月廿三日水曜日)…

我連合教育機関たる護教が成功ある一年を経過せることを報告するは委員 (= D.S.Spencer, 本多庸一)の喜ぶところなり 前記者たる別所氏の辞任は去年中に新編集者を選任するの必要を生せり而して日本メソヂスト教会の一牧師なる高木壬太郎氏其選に当り有効なる任務を尽しつゝあるなり…(『美以教会第十九回日本年会記録』M35)

② “…神学の論争が歓迎すべきものでないことは言ふ迄もなき事ではあるが、神学の研究は今一層奨励すべきことであると思ふ。我輩は此論争後間もなく美以教会年会の依頼に依り「基督論」といふ講演を横浜でやつたことがあるが、興味をもつて聴かれたとは思はなかつた。”(前掲「回顧と期望」)

⑥ 前掲「自から物せられし高木博士の伝記」(→福永文之助編『海老名氏の基督論及び諸家の批評文 基督論集』M35.4, 比屋根安定『日本近世基督教人物史』S10)

* “[明治35年] 一月十七日 金 晴 夜二入り風吹ク…此日海老名氏ガ新人誌上ニ掲ゲタル三位一体論ト植村氏ノ福音新報紙上ニ掲ゲタル批評トヲ読ム。三位一体ニ関シテハ余モ亦年来疑義アリ、未ダ満足ナル解答ヲ得ル能ハズ。海老名氏ノ議論モ容易ニ首肯シ難シ、尚研究ヲ要ス。新約聖書神学ノ研究ハ実ニ必要也。海老名氏ノ説ヲ読ミテ一層之ヲ感ゼリ。本日ヨリバイラツクヲ読ム事ト決シ、今夜第一巻第一章三福音書ニ依レル耶蘇ノ教訓緒言十四頁ヲ読ム。… 二月十九日 水 晴、強風 ヲアイズ新約神学ニヨリ約翰ノ基督論ヲ学ブ。… 三月五日 水 朝陰後晴 午前…新約神学ヲ学ブ。…”(『日記』)

* (…足下の宏量は海老名氏の如く顕はれずと雖、海老名氏に同情を有つことを公表して憚らず、されば足下は決して狭量の人にあらず。…然し…足下が余りに小心翼翼にして、余りに婉曲と寛容とに渡る、嫌なきやを疑はざるを得ざる也、…主筆足下の腰の弱きに余はガツカリしたり。)(「肅んで高木主筆足下に一筆を呈して以て評論に代ふ」柏峰生『護教』M38.11.11)

* (…従来ノキリスト論対して、公然論戦を開いたのは、海老名弾正氏であつて、明治三十五年の一月「新人」紙上に現れたる海老名氏の「三位一体論と余の宗教的意識」の一編である。氏の論旨は従来ノ三位一体論を排斥し、キリストの神性を否定したものである。当時此の論議に向つて応戦したのは「福音新報」紙上に於ける植村正久と「護教」に於ける高木壬太郎氏と「東京毎週新誌」紙上に於ける余(=小崎弘道)であつたが、爾後此の論戦は未だ其の結末を付けないものと言つても差支なからう。但し此の論戦以来基督教会内に自然新旧の両派が区画せらるゝことになつたことは明かである。…)(佐波巨編『植村正久と其の時代 第五巻』S13)

⑦ 「日本メソヂスト五十年略史〔五〕高木主筆の活躍」兼藤栄『日本メソヂスト時報』S15.10.4

⑧ 「中央会堂の二十年」『護教』M44.1.14, 中央会堂編『中央会堂五十年史』S15

⑨ * (…高畑和助は、高木壬太郎先生(あるいは内村先生)を慕つて上京し高木家に暫く寄宿したが、学成りがたく諦めて帰郷した。…)(《八木伊三郎氏〔八木又左衛門令曾孫〕談=松下麟一氏〔中川根町郷土史研究会々員〕聞書〔S62.8.23〕》)

* (…(父和助は)何も取り柄のない、やりくりの出来ない、一生ピンボーで通つた人です。…父の書いた物は何一つありません。私の少年の頃、草刈りや木炭運びに一諸にあるきましたが、今耳に残つて居るのは、父の云つた言葉、俺も若い頃ボケて何とか云う先生をたよつて東京に行つた事があるときいた事があります。…)(《筆者宛高畑卓一氏書簡〔S62.9.16〕》)

⑩ * (〔教報〕○静岡メソヂスト教会 …今夏教友の一人東京角管内村先生の夏季講習会へ出席本月六日内村先生も当地へ参られ同夜演説会を開き申候御承知の如く当地は大井川拾有余里の僻地にて万事不便諸先生方の来臨を願ふも誠に不如意に御座候目下四名の信徒は聖書の研究会を開き傍ら新聞雑誌を講読致し其信仰を養ひ居り申候誠に当地信徒中有力者無之又一定したる集会所も無之是迄集会所に付ては幾多の困難を経申候※近頃或人の茶部屋も借受集會場に致し居り候得共不都合の時之思ふまゝに集まりを開く事出来不申候私共は時々大井川原自然の大会堂に於て水清く月明かなるの夜互に祈祷感話の集りを開き居り申候斯次第誠に遠路険山を越えての旅なれば先生の御来臨を願ふも御氣の毒に存居候尚教友も如何にかして福音の宣伝を謀り度思ひ居り候へ共少数の信徒にて良き考案も無之教友にて幾分の貯蓄にても致し時々二回位先生を聘して公開演説会にても開き度心掛居り候へども第一負担に困難致居り是迄貴諸教会にて親密なる連絡を致し度と存し居り候へども遠方の事にて貴

会へ参る事も心に任せず云々…(松井豊吉氏)、『護教』M35.8.30 * 〈〔雑報〕○遠州上尾青年会
上長尾青年会は明治二十四年基督教団体を以て十数名のキリスト教賛成者相集り互に聖書を研究し
或は静岡より牧師の出張を請ひ基督教演説会を開き今日に至る迄八名の受洗者あり此間幾多の困難ありて
村民の嫌ふところとなり集会の場所もなく或る時は、大井河畔に会して祈祷会を開きしこともあり然れども
真理は最後の戦勝者にして蛇蝎の如く嫌はるゝ基督教も追々村民の是認する所となり当青年会は堅忍不拔の
信仰を以て主の恩恵の下に在り…(太田駒三郎氏報)、『基督教新聞』M29.2.29)

- 11 * 〈〔教報〕○高木さく子の永眠 静岡県榛原郡川崎町高木愛助氏室さく子急性脳膜炎にて俄に永眠
せられたるを以て去る廿五日午前十時同氏宅に於て葬儀執行、飯泉規矩三氏祈祷を捧げ且聖書を朗読
せられ、名波義三郎氏履歴を朗読せられ、高木壬太郎氏説教せられたり、遺骸は火葬の上同町の墓地
に葬らる、…)* 〈〔広告〕妻さく子病氣之處養生不相叶本月廿四日永眠致候間此段生前辱知之諸君に御
報告申上候也 高木愛助 親戚 太田虎吉 高木壬太郎)、『護教』M35.8.2 * 〈〔訃音〕○高木咲子は七
月廿三日急性脳膜炎とかにて三人の御愛児後にもまかり給ひぬ)、『東洋英和女学校同窓会報告』M
35.11)

12 「上長尾紀行〔上〕」飯泉規矩三『護教』M35.8.30

- 13 * 〈…私たち夫婦はバプテスト系の信者で、三十年ごろ高木先生の郷里における弟子・高畑喜太郎翁
と知り合い、高畑翁は九十才をこえてからも自転車で伝道にあるき、私も多くのものを与えられまし
たが、翁の話で、高木先生が内村鑑三先生を当地にお招きし洪水のため大井川を高畑翁が内村先生を
背負って渡った話や、高木先生がいかに偉大な人物であったかを教えられ… 九十才をこえてからも
凸凹道を自転車で来訪され、耳が遠いため筆談で聖書の話やされるなど熱心な信者であると同時に村
一番の篤農家で誰からも敬愛された翁のことをぜひ記録にとどめてください。…)(《筆者宛松下麟一
氏書簡〔S62.1.9.5.18〕》)

* 〈…私は大正元年十一月生れで七十四才です。生家が喜太郎翁宅と村道を隔てた隣家でしたので、幼
少の頃から翁が昭和三十三年七月四日、九十一才の天寿を完うし入寂までその人柄に接して来ましたが、
常に笑顔絶やさない好々爺でそれで居て、常に斬新卓抜な創意工夫に富み時代の先端を行く、
例えば農業用器械の購入とか自転車、ラジオなども他に先がけて求め、常に部落の先頭を行く感が
有ったが、信仰に関する勧めは一度も受けた事は有りませんでした。要するに翁は入信当時の友人達
も次々に死去し或は変信して仏教に戻りなどして只一人になったので周囲との関係を考慮して只自分
のみの信仰に生きたのではないかと思います。松下(麟一)さんとの件は、松下さんがクリスチャン
であることを知り、同志として談話することを楽しみにして居たのではないのでしょうか。年老いた孤
独な信者にとっては尊い生き甲斐の時間であったこと、思います。…)(《筆者宛八木芳郎氏〔八木
又左衛門令孫〕書簡〔S62.8.2〕》)

* 〈…高畑喜太郎翁は私の父の兄であり、此の人は情深い立派な人でした。…)(前掲《高畑卓一氏書簡》)

14 「上長尾紀行〔下〕」飯泉規矩三『護教』M35.9.13

* “…吾人の最も勤むべきは品性を建つる事也、人物をきたへ上ぐる事也、…大なる品性は一朝にし
て造り得らるべきものに非ず、又真正の品性は外部の制裁に依りて造り得らるべきものに非ず、…進
化の理法に従ふもの也、…様々の困難、誘惑、失敗、挫折に逢ふて時々刻々にきたへられ、進歩し、
発達する也、速なるを欲する勿れ、吾人生涯の事業として徐々に達することを勤むべき也、”(『無欲速
〔承前〕』『護教』M32.7.8) * “…所謂人格ノ高キ人トハ道德的品性ヲ中心トシテ一面ニ知識学問アリ、
他面ニ之ヲ活用スル才能アル人ノ謂デ、何時ノ世ノ中デモ必要ナル人物ハスル人格ノ人デアル…”(《青
山学院第三十二回卒業証書授与式告辞》T4.3.27【東神大】)(→「高木壬太郎」比屋根安定『哲学大辞
書 第3冊』大日本百科辞書編輯所編T15)

基督の一兵卒として

1 「誰れか我国を教化すべきか」『護教』M35.10.18

2 〈〔新刊広告〕神学士高木壬太郎先生著 基督教的品性 紙数百廿四頁、定価金拾五銭、郵税二銭

此書は高木神学士が基督教の最も重すべきは品性に在るを論じ、基督上説教中の美訓に就て基督教的品性の要素を詳述し、最後に品性修養の方法を論じたるもの也、文章は平易なる言文一致体にして何人にも了解し易く、健全にして実際の宗教を説くに於て秋毫の如何なし、信者は之に依て信念を養ひ、徳を建つべく、未信者は之に依て以て基督教の何物たるやを領解し、信仰の道に入るべし、修徳用、伝道用、又クリスマス及び新年の贈物用として最も適当也、幸に御購読の榮を賜へ（『護教』M36.12.12）

③ 「逆旅日記」 山路生『信濃毎日新聞』M35.12.6

* 明治35年8月19日、弥吉は、千駄ヶ谷に塚越芳太郎を訪い『信濃毎日新聞』主筆の後任を依頼するが、〈余や近時史を修するの意あり。窃かに光景の過ぎ易くして読書の時間乏しきを患ふ。乞ふ余を放任する猶一二年にして静かに青灯黄卷を友とするを得せしめよ〉との返事に〈氏の志の奪ふべからざるを知つて窃かに適当なる後任者なきを悲し〉んでいる。（「留任の意を明にす」山路生『信濃毎日新聞』M35.8.26）

④ 「宗教家分業の必要」『護教』M35.12.13

⑤ 「陳言一則」 山路生『信濃毎日新聞』M35.12.27

〈〔個人〕山路弥吉氏 信濃毎日新聞を辞したるやう記したる新聞もありしが同氏は依然同新聞の主筆として、一ヶ月の半は同地に在り、他の半は上京せられ独立評論を編輯せらるゝ都合也、…〉（『護教』M36.1.10）

⑥ 「〔広告〕護教（英国神学士 高木壬太郎主筆）」『独立評論』M36.1、『基督教世界』M36.1.15

⑦ 「〔評論の評論〕独立評論」『護教』M36.1.10

⑧ “〔明治36年〕七月二日 木 暴風 …独立評論第七号来ル。井上哲次郎氏、余ノ釈迦伝批評（＝「井上博士の釈迦牟尼伝を読む〔其一～三〕」『独立評論』M36.1～3①）ニ対シ嘲罵的ノ言ヲ弄ス②、其卑劣ニアキレタリ。七月三日 金 晴 …井上哲次郎氏ニ答フル文ヲ草ス、護教掲載ノタメ也。其内独立評論ニ掲載ノ文ヲ草スル筈ナリ。③”《日記》

① “…曩に井上博士が「釈迦牟尼伝」を著すや、先づ釈迦の事蹟を伝へたる文籍の歴史的価値を批評することを為さず、唯自己の哲学的思考に依りて自分勝手に歴史的事実を判定したりしは我輩の当時指摘したりし処也。…”（「孔子論」を読む『護教』38.4.15）

② 〈…嘗て本誌に高木壬太郎と云ふ人が吾々の著述の「釈迦牟尼伝」を評したことがあります。…実は其内容の主なる点には触れて居らぬのであります、釈迦の事蹟に付いての駁論と見るべきものが殆どないので、僅にあるものは歯牙に掛くるに足らないこととあります。…吾々は迷信者を敵として其迷信を破砕し終らんければ已まない決心で居りますからして迷信者が彼れ己れの迷信に都合の好き弁護の駁論を試みた所が何等の痛痒をも感じないのであります。…〉（「青年の精神的危機」井上哲次郎『独立評論』M36.7）

③ “…嗚呼井上氏の性質、氏は果して誣妄虚言を世に公にしたることなき、善者を装ふことの出来ざる善人なるべきか、知るを知るとし知らざるを知らずとする正直謙遜の学者なるべきか、抑も亦曾て高橋五郎氏の評したる如き倨傲尊大の偽哲学者なるべきか、天下具眼の人は必ず之を知らん。”（「人生問題の研窮に就て」『独立評論』M36.9）（→「青年と宗教とを論じ併せて高木氏に答ふ」井上哲次郎『独立評論』M36.3、「井上文学博士の答弁を読む」高木壬太郎「寄」独立評論社「書」井上哲次郎『独立評論』M36.12.3）

* 〈〔東京別信〕〇山路愛山氏の『独立評論』紙上に、井上哲次郎博士は大に高木壬太郎氏に衝き当り、従て基督教徒全体にも毒づかれ候。我輩は元来此の喧嘩の起源及成行を熟知不致候へば、何とも申上げ様無之候。然かし高木氏の「釈迦伝」批評が、全く竜頭蛇尾にして、正当に批評したといふより寧ろ他の欠点を指摘した方なることは、衆目の見る所に候。若し之れが為に博士の憤怒を招きたるものならばそは高木氏の自業自得と存じ候。而して御相伴に毒づかるゝ基督教徒全体は頗る迷惑の至りと存じ候。然かし同じ独立評論紙上に、高木氏のよりも一層皮肉に一層猛烈に博士を攻撃せる愛山氏の論文あれども、博士は一方にのみ相手になりて、他方には不相關焉の様なるが誠に不思議の至りと存候。（A B生）（『基督教世界』M36.10.15）

- ⑨ 「基督の楽天観」『護教』M36.6.20, 「約百紀論〔七〕」『護教』M37.3.19, 「生の宗教」『開拓者』T4.11
⑩ 「苦汁, 甘汁, 酸汁」山路弥吉『信濃毎日新聞』M37.4.30, 「ひとり言」愛山生『国民新聞』T2.9.14
⑪ 「戦争と基督教徒」M36.10.24, 「入峡の記」M36.11.7, 「相良紀行」M36.11.14, 「長野紀行」M36.11.21,
以上『護教』の壬太郎文。

- ⑫ 「伝記を学ぶべし」『護教』M36.10.31

* “[明治36年]十月廿八日 水 雨 「ウエスレー伝」校正二午前ヲ費ス, 是ニテ全ク校正ヲ了ル。…”
《日記》

* <〔最新刊広告〕神学士高木壬太郎先生著 ジョン, ウエスレー伝 紙質上等印刷鮮明, 肖像入紙数凡三百廿頁 ウエスレーは敬虔なる聖徒, 偉大なる宗教家にして, 唯独りメソヂスト教会の創設者なるのみならず, 第十八世紀に於る宗教改革者也, 彼が独りメソヂスト教会の私すべき者に非ざるはルーテル独りルーテル教会の私すべき者に非ざるが如し, 高木神学士我国に適當なるウエスレー伝なきを憂へ, 本年其生誕二百年に会し此書を著述せらる, 著者がウエスレーに精通せらるゝは論を要せず, 其明晰流暢にして且趣味に富める文字を以て此偉人の一生を叙述せられたる事なれば, 此書を読むものは面白く此偉人の生活, 事業を学び以て其信念を養ふを得べし, 東京市京橋区尾張町二丁目警醒社書店(『護教』M36.11.14)* <〔新刊紹介〕●ジョンウエスレー伝 高木壬太郎著 警醒社発行 本書は護教の主筆たる高木氏がジョンウエスレーの生誕二百年に方り此偉人を我國民に紹介せんとて著流せられしものなり つとめて直截簡明に叙述せられたりと雖尚三百頁に余る伝記なり 大著と云ふにあらざれども只一片の小冊子にらず 吾人は我国の教界に於て熱誠なる偉人を伝ふる此好著を得たるを喜ぶ(『基督教世界』M36.12.10)*

<〔新刊紹介〕ジョンウエスレー伝 高木壬太郎著 英国の中世に於てはウイックリーフあり, 殆ど当時の英国社会を改造したり, 而して其後近世に至りてはノックス, クロンウエルあり, 是れ亦た更に大英国の社会を転覆するほどに改造したるもの, 然るに同じ系統を有して, 而して最近史の劈頭に出でたるものを, 即ち此ジョン, ウエスレーとす。ウエスレーは説教者若くは新教会の建設者を以て出でたるものなり, 然れども其人物の偉大にして思念の百万に迸りしものありしを以て, 其事業は社会の改革に及び, 当時の腐敗を一掃し, チャーレス二世より引続き来れる頽廢を回したる大功に於ては, 正に大ピットと比せるゝもの也。ア、今や我国は常に彼の大ピットと此ウエスレーとを要するの時なり, 然して此伝や出づ, 吾人豈之を歓迎せざること能はんや。(発行所東京々橋区尾張町警醒社 定価金五拾銭)》(『警醒』M36.12)*

<〔新刊書 紹介〕○ジョンウエスレー伝 是れ能文なる「護教」記者高木壬太郎氏が, ウエスレー誕生二百年を紀念せんがために著述されたるもの, 全篇十三章, 十八世紀初代の英国より説き始めて其性行及事業の效果に至る, 時代の要求, 敬虔にして偉大なる宗教家の面影躍如として見ることを得べし, 革新を要し人格を要する現代の日本に於て本書の如きは蓋し真面目なる青年の読物たるべし(東京警醒社発行 定価五十銭)》(『新人』M37.2)

※「青年なる説教者」M34.6.1, 「実験的宗教」M34.10.26, 「几上漫話」M35.8.9, 「ウエスレー降誕二百年の紀年」M36.4.25, 「ジョンウエスレー誕生二百年に会して」M36.6.27, 「ウエスレー伝の教訓」M36.7.4, 「基督教とメソヂズムと」M36.7.1, 「宗教と身体」M36.10.10, 「基督信徒の神聖」M37.10.8, 「無頓着の風潮(熱心の真偽)」M37.1.26, 「講壇に対する苦情〔下〕」M38.5.27←以上『護教』の壬太郎文。「ウエスレーの偉業」T2.1, 「ウエスレーの人道観」T2.9←以上『宗教之日本』の壬太郎文 など参照。

- ⑬ 前掲《高木君ハ死なぬ》

左近義弼については以下の資料を参照した。

「左近先生逝く(一)~(三)」比屋根安定『基督教新聞』S19.9.10.9.16.9.25, 増田金四郎《凡人左近先生(故人を語る)》【左近節子氏】、「左近義弼とその時代—日本の旧約学の歴史の一断面—」左近義慈『神学』S40.1

- ⑭ 前掲「長野紀行」

- ⑮ 平田平三《架替へなき高木博士の死》T11.8【東神大】,(→塩入隆『長野県町教会百年史』H4)

- ⑯ 「戦争の開始」『護教』M37.2.13

17 「所謂非戦論者を戒む」『護教』M37.4.9

18 「禍転為福論」『護教』M37.4.30

* “〔明治37年〕四月十日 日 晴 …四時頃、武田芳三郎氏ノ招ニ応ジテ往テ晚餐ノ饗ヲ受ク、山路愛山亦共ニ招カル。七時ヨリ愛山ト共ニ麻布教会ニ於テ演説ス、創立廿年ノ紀年ナリ、余ノ題ハ禍転為福説也。了テ武田氏方ニテ談話、十一時頃帰寓。”《日記》(→「〔巻頭〕」山路弥吉『独立評論』M37.2、「村莊日誌」愛山生『信濃毎日新聞』M37.2.13)

19 白石喜之助《高木博士に就いての我思出》T11.10.24【東神大】*「予が非戦論」白石喜之助『護教』M37.4.9、(→〈白石氏は遠州掛川にありて教会を牧せるの人、今の宗教界に尚斯の如きの人ある以て人意を強くするに足る〉「〔文壇演壇〕」『平民新聞』M37.4.24)

* “…余は原野牧師よりウエスレー記念運動応援の為め懇なる招聘を受くるや大なる喜悦と深き興味とを以て之を承諾したり。即ち〔明治36年〕十一月五日午前七時三十分新橋発急行列車に投じ西に向ふ。…白石喜之助氏掛川より来りて先づ在り、…七時を報ずるや演説会は原野氏に依りて開かれ、白石氏先づ「習慣」と題して演じ、次に余は「唯一の宝」と題して一時間半の長演説を試みぬ。…六日天気晴朗、午前九時原野、白石両氏と海岸を散策す。遠く東を望めば富嶽雪を戴きて秋天に懸り、近く前面を眺むれば浸々たる水は碧波を跳らし、御前崎目睫の間に横りて遙に模糊たる豆山に對す。平生万丈の紅塵中に忙殺せられんとする者来りて半日の閑を此処に消す、其快愉ふ可らず。…”(前掲「相良紀行」)

20 前掲「高木壬太郎氏の事ども」

21 * 「〔新刊紹介〕宗教小観」『福音新報』M37.5.14 (→〈〔新刊雑書〕▲宗教小観本書は英国文学士高木壬太郎氏の著にして其内容は氏が折に触れ時に応じ得意の鋭毫を揮ひたる論集なり本一小冊子に過ぎず雖も精読一過すれば人性の要求する宗教の真髓を捉ふるに難からず著者は身、中央教会の牧師たるも宣教師的臭味なく其立言の公平にして信念的確なる今日の宗教社会多く其の儔を見ず文章流暢、理義明白、苟も経世の志あるものは何人も一読の価値あり(警醒社発行)〉(『東京日日新聞』M37.3.21) * 〈〔新聞広告〕英国神学士高木壬太郎君著 宗教小観(紙数百八十二頁 定価十八錢 郵税四錢)は是れ著者が宗教に関する三十有余篇の論文を集めたる者にして、宗教の本義を明にし、靈的修養資料として最も適當也、著者の文辞と議論は世既に公論あり、必ずしも贅せず、現下精神問題研究の盛なる時に方り幸に購読の榮を賜らんことを望む〉(『護教』M37.3.27.4.2) * 〈〔新刊書紹介〕○宗教小観 教文館発行 定価十八錢 郵税四錢 高木壬太郎氏が最近一二年間に於ける宗教上の論文を蒐輯したるもの、著者は病的、不健全の思想を排斥し、宗教に関する正当の見解を与へんことを願ふと云へり、多くは短文にして重要な問題も論じて精に入らざれど、所謂頑僻に陥らず行文また流麗、求道者の一助たるべし〉(『新人』M37.4) * 〈〔新刊書紹介〕宗教小観 高木壬太郎著 期するところ概ね吾人と意見を同ふす、今日に於て闊大なる見識と、時勢に後れざる活説教を含むものと謂ふべし、吾人はメソデストが時勢後れの宗教なりと聞けり、而かも今日に在つて之を見ればプレスビテリアン派より遙るかに進歩せるを視る、殊に人情に訴へて其理性を説くところ、此派の独特と謂ふべし、教文館の発行書中に此書を見る、メソデストの価値を上げたるものと謂ふべし。(発行所東京々橋区教文館 定価金拾八錢)〉(『警世』M37.3.24)

22 「戦時伝道同志会設立の議」高木壬太郎『護教』M37.5.14

* 日露戦争が義戦であることを海外に訴えると共に国内の宗教家が一致して時局に当たろうと、井上哲次郎・井深梶之助・本多庸一・小崎弘道・江原素六・海老名弾正・元田作之進らの発企により開かれた「大日本宗教家大会」(5月16日、芝公園内忠魂祠堂会館)に、壬太郎は、賛成員の一人(他に波多野伝四郎・星野光多・徳富猪一郎・渡辺国武・田村直臣・綱島佳吉・植村正久・安藤太郎・島田三郎・平岩愼保ら)として名を連ねている。(大日本宗教家大会事務所編『宗教家大会彙報』M37)

23 前掲「所謂非戦論者を戒む」「誤りたる勤儉論」M37.4.9、「戦闘的態度を取るべし」M38.1.2、以上『護教』の壬太郎文。

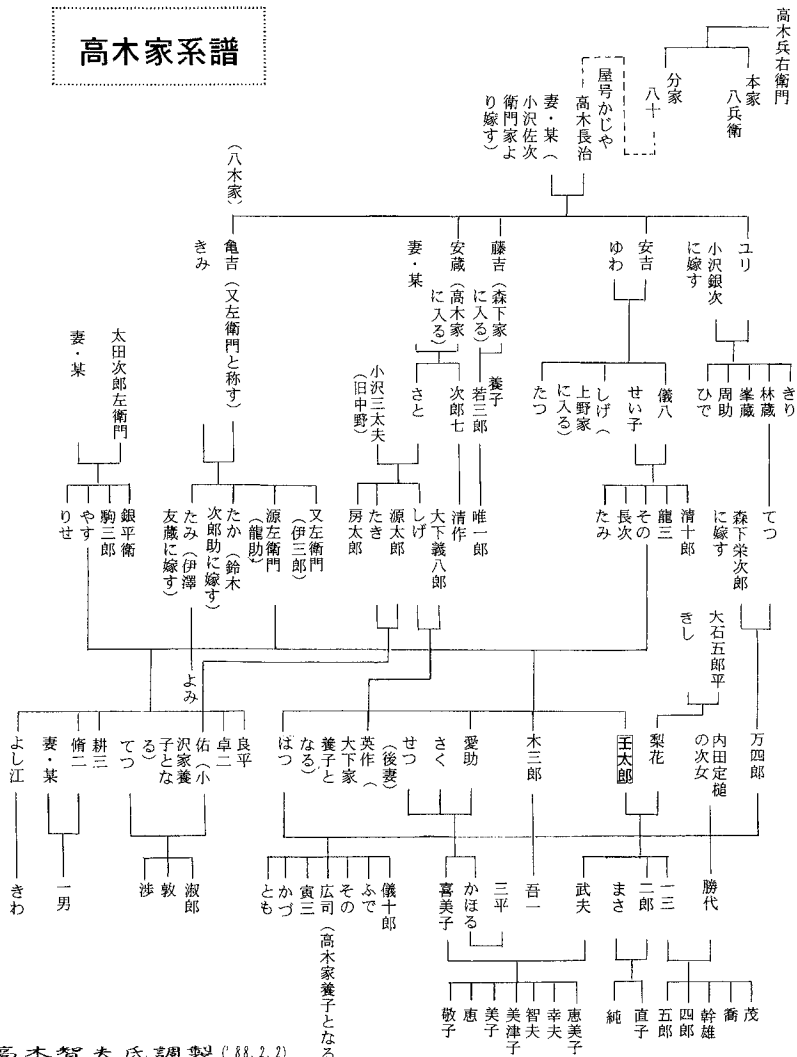
高木壬太郎 (1864-1921)

明治大正期の神学者、教育家。遠江国榛原郡中川根村に生まれる。静岡師範学校在学中に山路愛山と詩文雑誌『呉山一峰』を創刊。御殿場の小学校長時代、自由民権運動に奔走。86年静岡メソジスト教会で平岩愼保より洗礼を受ける。89年上京し、東洋英和学校に学ぶ。95年から3年間カナダのヴィクトリア大学留学（新約聖書神学専攻、1906年神学博士号取得）。帰国後、東洋英和学校、青山学院教授を務め、13年青山学院長に就任。上京以来この間、築地、麻布、中央会堂、駒込各教会牧師およびメソジスト派機関誌『護教』の主筆として活躍。『基督教大辞典』(11)を編纂。著書『ジョン・ウエスレー伝』『基督教的品性』『基督教安心論』『生活と宗教』など [川崎 司]



『岩波キリスト教辞典』(2002年6月刊・岩波書店)所収

高木家系譜



高木智夫氏調製 ('88.2.2)